

「科学と仏教」

佐々木 閑 (2016.11.25)

1. 仏教の基本原則 (大乘仏教の原理ではない)

- ① 仏教の世界観：因果則によって粛々と進んでいく現実の世界と、自我に縛られ自己に都合のよい世界を期待する人間の世界観の齟齬から、「生きる苦しみ」が現れてくる。
- ② この苦しみを緩和し、消去するためには、人間が本来持っている自己中心的世界観を、自力で削減するしかない。
- ③ 「一切皆苦」 → 「諸行無常」「諸法無我」 → 「涅槃寂靜」

2. 科学の人間化と釈迦の世界観：科学と釈迦の仏教では、真理を追究する世界観が同じ次元にある

① 物理学：ケプラー，ガリレイ，デカルト → ニュートン（重力という不可思議力を組み込んだ機械的世界観） → アインシュタイン（観測主体を神から人間へと移し替えた） → 量子論：コペンハーゲン解釈（観測主体の独立性は成り立たない） → エベレットIII：多世界解釈（人の自己同一性は成り立たない） → ウィッテン，マルセラス，大栗博司（時空間の次元は相対的なものであって確定しない）

② 数学

他の科学が、外部からの情報を基にして、神の視点を否定していくのに対して、数学は、精神内部の論理思考（基盤は数学的帰納法か）によって神の視点を否定する。しかし基本構造はどちらも同じ。

数概念の拡張：無理数の登場（ピタゴラス教団） → 虚数の登場（タルターニャ，カルダーノ，フェラーリ） → 超限数の登場（カントール，ヒルベルト）

自己陳述における，論理思考の限界：ポアンカレ，ヒルベルト，ラッセル，ゲーデル，チューリング）。さらに，カオスとフラクタル。

③ 進化論

「造物主がすべての生物をお創りになった。その中でも特にすぐれた完璧な生物にして万物の霊長、それこそが人間である」

↓

「進化は機械論的に、そして高い許容度をもって、無方向的に進む」

総括：科学の人間化：「我々の世界はこうあるはずだ」という、脳の直覚が生み出す完全なる合理の世界（神の世界）が、現実観察によって次第に修正されていく流れ。

・科学は物質世界の真の姿を追い求めて論理思考を繰り返すうちに、神の視点を否応なく放棄させられ、気がついたら、神なき世界で人間という存在だけを抛り所として、納得できる世界観を作らねばならなくなっていた。

・一方の（釈迦の）仏教は、同じく神なき世界で、人間という存在だけを抛り所として、納得できる精神的世界観を確立するために生まれてきた宗教である。

自己中心の分かりやすい世界が苦しみの原因。真の現実世界は、受け入れがたい不思議さをもっている。

3. 科学と仏教の組織としての共通性

① 仏教の定義：仏（ブツ）・法（ダルマ）・僧（サンガ）

② サンガの存在意義

「自分のやりたい事をひたすらやり続けるための組織」：布施に頼る

↓

「出家」という発想

③ 組織設計者としての釈迦：生き甲斐のための組織

・世俗の価値観で生きることのできない人のための組織

・なにを捨て、なにを得るのか（世俗の幸福を捨て、生き甲斐追求の人生を手に入れる）

・オウムの間違いは「捨てるものと得るものを取り違えたこと」

④ 「律」の必要性（オウム真理教には律がなかった。理研にもなかった）

- 1) 出家制度：修行に専念するための組織（科学者の世界）
- 2) 資金調達法：（世間からのお布施）
- 3) 統率システム：（権威の否定，完全な法治主義）
- 4) 自己浄化機能の完備と，世間への十分な告知

⑤ 規則の実例：最も重い罪（波羅夷罪）四条

第四条「自分で自覚もないのに、『私は悟った』『悟りに近づいている』と
いったようなことを人に語り，後になってから『実はあれは嘘でした』
と自白した者は波羅夷罪である。ただし，その時本当に自分が悟りに近
づいたように思い込んでいて人に話し，あとでそれが思い違いだと気づ
いた場合は無罪である」

⑥ 現代における典型的出家組織としての科学者の世界，政治家の世界

・出家者としての科学者

- 1) 真理追究の人生を，お布施によって実践する
- 2) 情報共有体の形成
- 3) 独自の戒律：例えば
 - ・研究費の個人的流用は重罪
 - ・論文の捏造，盗用は重罪
 - ・研究活動をなまけることは重罪
 - ・世間にこびて客観的態度を崩すことは重罪
- 4) 布教活動の重要性「お布施の受用」「リクルート」

・出家者としての政治家（上記，科学者の項に準ずる）

原則：「社会全体からのお布施で政治活動をさせてもらっている政治家は，か
けもちの活動をせず，全精力を政治活動に傾注しなければならない。そして個
人的利得や，あるいは一部団体だけのための利益を追求してはならない」